【報告】

ラベルワークを用いたポートフォリオ評価法の試み

石塚　淳子　　佐藤　道子

聖隷クリストファー大学　看護学部

A Trial of Portfolio Assessment with Labelwork

Junko ISHIZUKA, Michiko SATO

Seirei Christopher University School of Nursing

抄　録

筆者らはこれまで実践を積み重ねてきた『ラベルワーク』という方法を用いてポートフォリオ評価法の開発をしている。ポートフォリオ評価法の特徴として、学生一人一人がどのように成長したかそのプロセスが一目瞭然となること、教師と学生が一緒に評価することで、従来の教師主導の一方的な評価から、コミュニケーションという相互作用をとおしての共同評価となること、ポートフォリオは学生の自尊感情や自信、学習意欲を育むこと、自己評価や他者評価という対話を通してメタ認知能力をつけるのに有効であるということが挙げられる。ここでは基礎看護実習Ｉでラベルワークを用いたポートフォリオ評価法の試みを報告する。

キーワード：ラベルワーク、ポートフォリオ評価法、基礎看護実習

Ⅰ．はじめに

筆者らは2003年の日本看護学教育学会第13回学術集会の交流セッションを企画し、【学習者参画型の学習方法（その２）―新しい評価観と評価技術の構築を目指して―】というテーマで参加者とディスカッションをしたことがある。看護教育における評価方法について参加者から様々な意見が出された。「評価をしてもなんだか釈然としない」「実習後など評価表の中では評価しきれない成長を認めたい」「態度面の評価をどう表現して評価規準を立てればいいのか」などの意見があり、特に実習の評価についてはどうしたら本当の学生の姿を評価できるのか、問題提起をする参加者が多かった。

看護学実習の評価は実習の目的・目標を評価基準とし、その達成度を得点化して実習成績としている。看護学実習は「①人間を対象に展開される授業②複雑な人間関係と多様な場所と時間において展開される授業③看護を提供する職種の専門性が問われる授業④多様な教育背景をもつ指導者の存在する授業」[1] という特質をもつため、その学習活動と教授活動は複雑である。多様な学習過程を踏む看護実習評価において、学生個々の体験からの成長過程を踏まえた評価方法に多くの看護教員が評価の困難さを感じるのは不思議ではない。

一方、筆者らは、林（1994）による「学習者参画型の学習方法」[2] に注目し、そのツールとしてのラベルワークの手法を看護教育の場に取り入れ実践してきた[3) 4)]。そこで基礎看護実習において、ラベルワークを用い、評価方法の試みとしてポートフォリオ評価法を取り入れてみることにした。

ここでは１年生の基礎看護実習Ⅰにラベルワークを用いたポートフォリオ作成のプロセスとその評価法の試みを報告する。

Ⅱ．ラベルワークとは

ラベルワークは林による参画理論と参画教育に基づいて開発された。ツールとして『ラベル』という媒体が用いられる。

ラベルとはある目的意識（テーマ意識）を持って観念された、ひとまとまりの認識内容をまとまりごとに個別に表記したものである。このラベルに書かれた言葉が意味を持ち、「知識」の断片となって行き来する。

ラベルは単に情報の伝達という役割だけでなく、ラベルを介在したコミュニケーションという相互関係を創り出す道具ともなる（ラベルケーション）。さらにそのラベルを使って図解を作成し、その作成過程を通して内容を創りだし、学習者相互の関わりを通して知を形成していく（ラベル図考）。（**図１**）

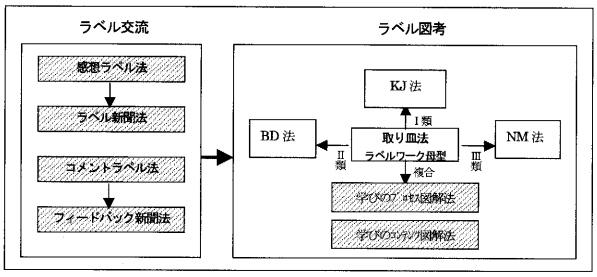

図１　ラベルワークのコンセプト
（2000．林を改訂，2002．林）[5)]

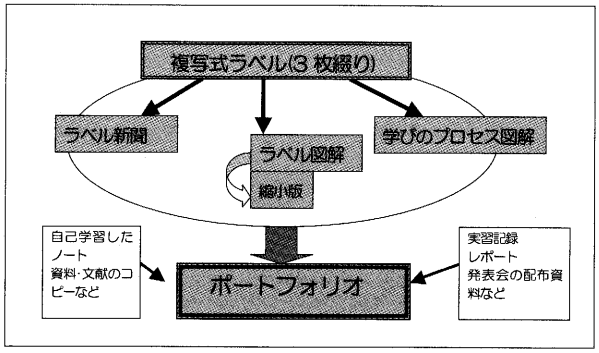

図２　複写式ラベルとポートフォリオ

今回の実習では、ラベル新聞、ラベル図解、学びのプロセス図解を作成した。それらの作品と自己学習したメモ、文献、実習記録などをファイルして 1 冊のポートフォリオを作成した。(**図 2**)

Ⅲ．ポートフォリオ評価法とは

西岡（2003）は「ポートフォリオとは、子どもの作品、自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などを系統的に蓄積していくものであり、ポートフォリオ評価法とは、ポートフォリオづくりを通して、子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習活動と自らの教育活動を評価するアプローチである」[6] と定義した。

さらに、エスメ・グロワード（1999）はポートフォリオ評価法の特徴を、「① Authentic Assessment であること②自尊感情や自己効力感を高めること③【学習のための評価】であること④自己評価からメタ認知能力へ」[7] を挙げている。つまり、点数による評価では見えてこない、学生ひとり一人がどのように成長したかそのプロセスが一目瞭然となり、教師と学生が一緒に評価することで、従来の教師主導の一方的な評価から、コミュニケーションという相互作用をとおしての共同評価となる。ポートフォリオは学生の自尊感情や自信、学習意欲を育む。さらに、自己評価や他者評価という対話を通してメタ認知能力をつけるのに有効であるということである。

2000年12月の教育課程審議会の答申で【これからの評価の考え方】が示された。[8]

①学力を知識の量のみでなく自ら学び自ら考える力など「生きる力」でも捉える。

②絶対評価を重視し、個人内評価を工夫する。

③指導と評価の一体化を図り、子どもや保護者に学習の評価を十分に説明する。

このような流れの中で、日本の小学校や中学校の教育の現場ではポートフォリオ評価法が注目され、多くの学校や教師が総合的学習の評価方法に取り入れている。

Ⅳ．基礎看護実習Ⅰにおけるポートフォリオ評価法の実際

1．2004年度の実施内容

対象は2004年の基礎看護実習Ⅰ（1単位45時間）で筆者らが担当した4グループの学生24名である。

学生にはポートフォリオを作成する意義、ラベルワークに関するガイダンス等をオリエンテーションし、同意を得て実施した。

病院実習として臨地に出かけるのは 3 日間、学内のまとめ 1 日、クラス全体発表会 1 日、個人のまとめ 1 日、計 6 日間の実習である。

ポートフォリオはガイドに従って作成していった。(**表 1**)

まず、毎日の実習終了後に感想ラベルを記入する。毎日、実習の最後に 1 時間のカンファレンスを実施しており、そのカンファレンスで学生たちはお互いの実習体験を語り合う。その日のカンファレンスの司会者は全員分の感想ラベルを用いて【ラベル新聞】を作成する。翌日コピーし、学生全員と教員、実習指導者に配布した。(**図 3**)

学内のまとめではグループ全員分の感想ラベルを集めて【ラベル図解】を作成する。そしてその図解をクラス全体の発表会で発表し自由討論を行う。(**図 4・図 5**)

発表会の終了後、感想ラベルを使いながら個人で【学びのプロセス図解】を作成する。(**図 6**) そ

表１　ポートフォリオ・ガイド

ポートフォリオを創ろう

ステップ１：毎日の実習終了後、【感想ラベル】を書きましょう

実習終了後、カンファレンスの前に【感想ラベル】を書いて保管しておきましょう。
枚数は何枚でもかまいません。
【感想ラベル】とは実習で学んだこと、感じたこと、気になったこと、良かったこと、困ったこと、何でもOKです。

ステップ２：毎日の実習の学びをラベル新聞にします。（作品１）

カンファレンス終了後、【カンファレンスを終えて】という感想ラベルを書きます。
枚数はひとり２枚です。
この【感想ラベル】を用いて、司会者は新聞を作成してください。
翌日印刷して学生全員、教員、実習指導者に配布します。

ステップ３：グループで学びのまとめ【図解づくり】をします。（作品２）

学内の実習のまとめでは【ラベル図解】を作成しながら実習の学びを整理します。
具体的な方法は当日お話します。

ステップ４：前半・後半グループで発表会と自由討論をします。

８月５日(木)午前中、それぞれのグループの作品２を発表しあいましょう。
そして自由に意見交換しましょう。
午後の全体発表の準備もします。

ステップ５：クラス全体の発表会で発表します。

自分たちの学びを、クラスのみんなに紹介しましょう。
どのように発表するか、プレゼンテーションの方法も工夫しましょう。

ステップ６：発表会のまとめをします。（作品３）

発表と自由討論の内容を、それぞれのグループで簡単にまとめます。

ステップ７：学びのプロセス図解を作成します。（作品４）

それまでの学びを振り返り、【学びのプロセス図解】を作成します。

ステップ８：学びの振り返りをします。

それぞれの学びの「プロセス図解」を持ち寄って語り合いましょう。

ステップ９：レポートにまとめます。（作品５）

【看護について考えたこと】というテーマでレポートを書きましょう。

ステップ10：それまでの作品をあつめてポートフォリオを作成し、学びを評価します。

１冊のファイルにまとめてみましょう。
完成したポートフォリオを眺めながら、実習の自己評価をしましょう。
さらに、ポートフォリオが完成したら、ポートフォリオを眺めながら実習の学びを評価します。
短時間ですが、担当教員と面接しながら、どんな体験ができたのか、今後の自己の課題は何なのか、整理して次の学習のステップとしましょう。

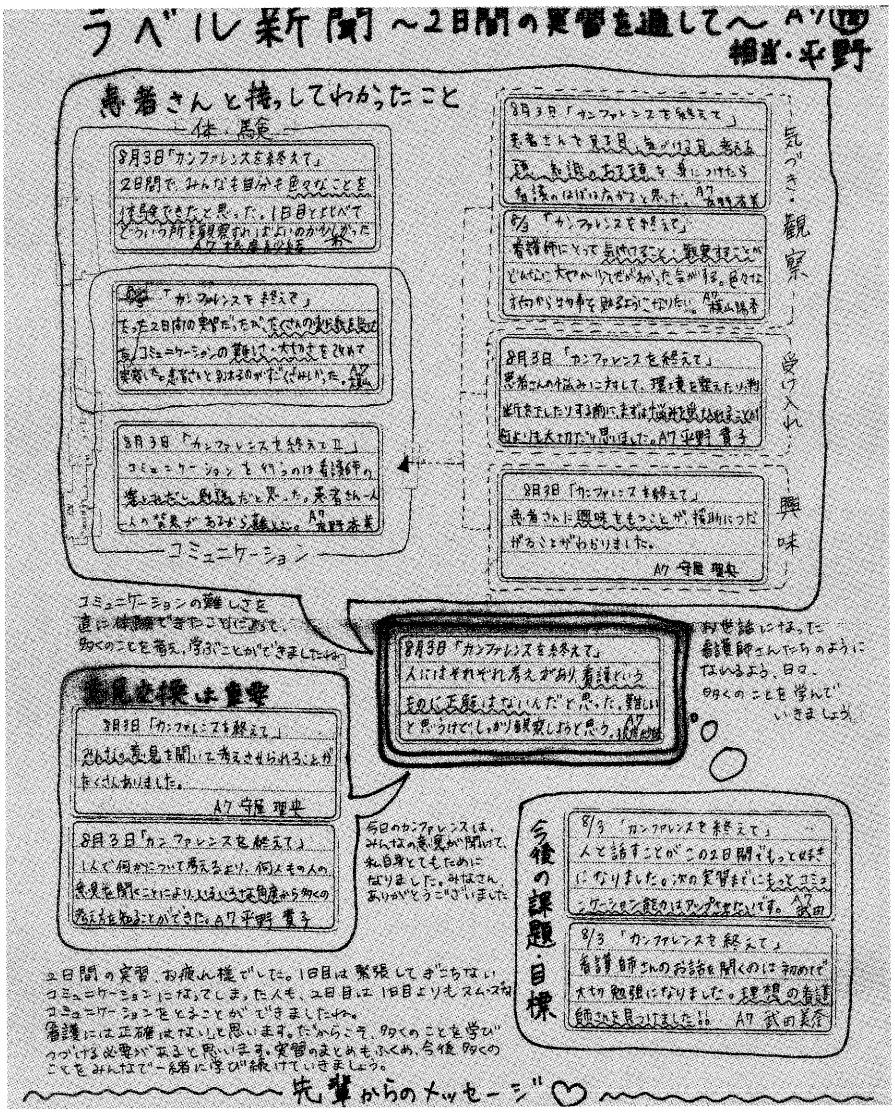

図３　【ラベル新聞】の例

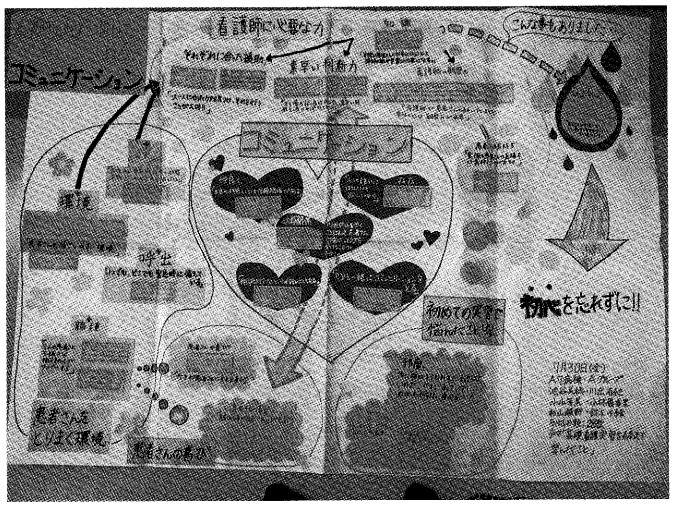

図４　学生が作成したラベル図解（模造紙に作成）

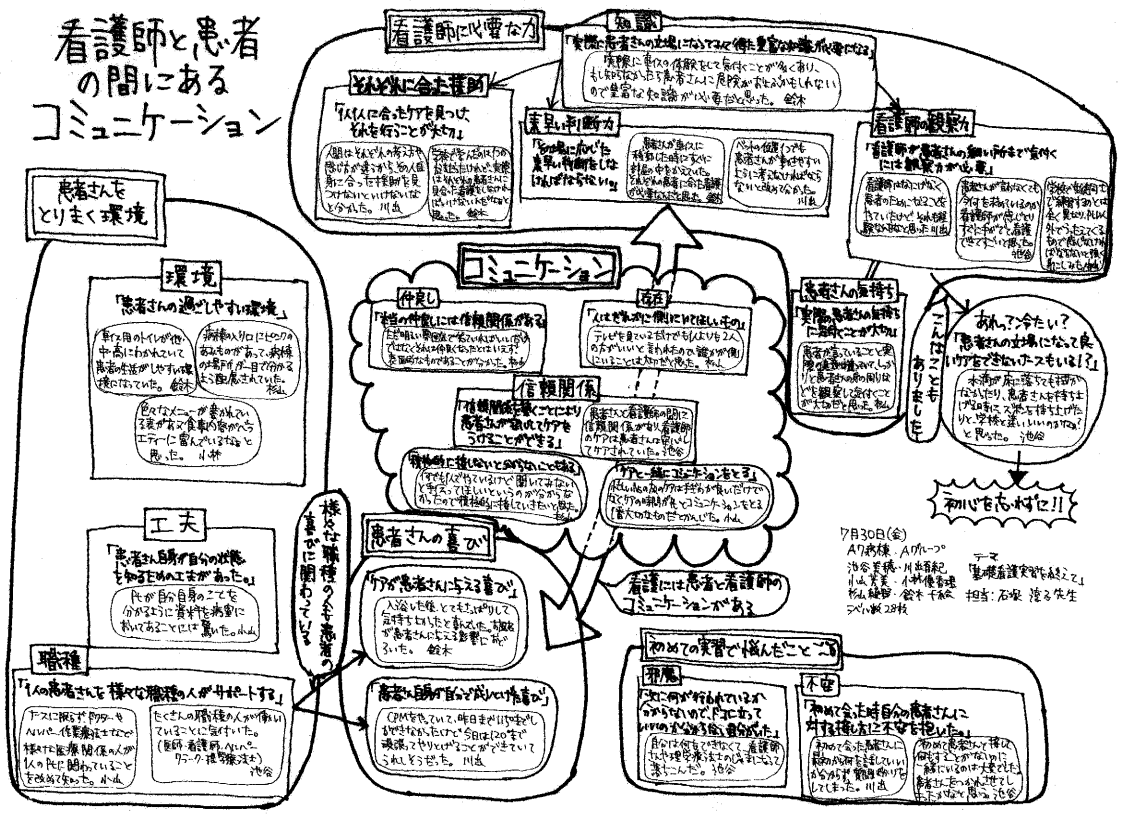

図５　ラベル図解を縮小したもの（Ａ３で作成）

図６　学生が作成した【学びのプロセス図解】の例

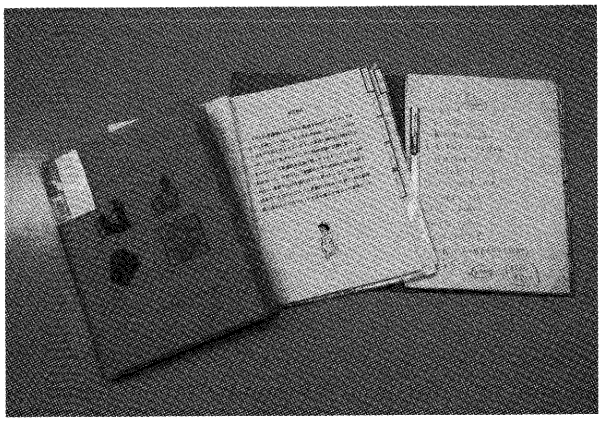

図７　学生が作成したポートフォリオの例

の学びのプロセス図解をグループのメンバー間で発表し、コメントをしながら自分の学びの振り返りを行う。

学生はこれらの作品を集めてポートフォリオを作成した。（**図７**）

実習の評価は、基礎看護実習Ⅰ評価表に基づいて行なった。

２．2004年度の評価

実習終了後学生に自由記載によるアンケートを記入してもらい、ポートフォリオを作成してよかったこと、よくなかったこと、改善点等の意見をもらった。

さらに、９月に京都大学の西岡加名恵先生に直接お会いし、基礎看護実習Ⅰの実践報告をさせていただき、ポートフォリオ評価法についてアドバイスをいただいた。ポートフォリオ評価法では、【対話】が重要であること、ポートフォリオを用いながら対話する機会をつくるようにということであった。

さらにルーブリック（評価規準と評価基準のこと）をボトムアップで作成していくこと、それには教員が感じている学生の姿を十分に討論することで可能となるというアドバイスをいただいた。

ラベルワークという手法にも興味を持っていただいたようで、「面白い方法ですね、是非実践を積み重ねていってください。」と励まされたことを付け加えておく。

看護実習には目的・目標があり、将来の医療を担う看護者として学んでほしいことはある程度は明確であり、それは【基準準拠型ポートフォリオ】に近いと考える[9]。これはあらかじめ決められた評価規準を提示し、必要な作品も教師が指示するものである。実施内容は大きく変更せず、実習最後に学生と教員の面接を加えることにした。

３．2005年度の実施内容

対象は基礎看護実習Ⅰ（１単位45時間）で筆者らが担当した４グループの学生24名である。

2004年度に準じた方法で実施し、最後に学生と教員が１対１でポートフォリオを振り返り

表２　学生のアンケート（自由記載）

- 一生の宝物になった。
- 新聞にどのようなコメントを書いてくれるのか楽しみだった。
- 自分の中で、どのような変化が起こっていたのか整理することができた。
- 今の自分に何がかけていて、これからどのような目標を持って勉強していけば良いのか、はっきりした。
- 後で見返すことができるのでよかった。
- 他の人の考えがよくわかった。
- 自分やメンバーの日々の気持ちの変化、援助の方法が変わっていくのがわかってよかった。
- １日ごとに自分の反省点の評価ができて、次につながった。

ながら面接を行った。評価方法は基礎看護実習Ⅰ評価表に基づいて、学生と教員が話し合いながら一緒に評価するように修正した。

Ⅵ. 考　察

学生のアンケートを表2に示す。ポートフォリオを作成することは、学生たちは自らの実習体験や思考のプロセスを形として残し、その学習の過程で生み出されたものを集め、最終的に実習の目的が達成されたかどうか、自分で振り返ることを可能にする。学生らは「実習の場面を思い出しながら作成できた。自分の成長を実感することができた」「グループメンバーと協力しながら学ぶことができた」「このポートフォリオは一生大事にしたい」などの感想を述べていた。

さらに実習指導者の反応として、ラベル新聞を配布したことについて、「前日のラベル新聞をコピーしてくれるので、昨日の実習の様子がよくわかった。これを見ながら、今日の学生の指導をどうするか、考えることができた」「自分だけではなく、病棟全体のスタッフにも、ラベル新聞を示しながら具体的に伝えることができる」などのコメントをいただいた。

教員の感想では、「学生の感想ラベルがそのまま張ってあるので、あの時こうだった、と場面を思い出しながら教員自身もその時の指導を振り返ることができた」「プロセス図解の発表は感動的だった。皆がお互いの成長を喜び合っている場面だった。グループメンバーからのコメントラベルはお互いを尊重し合えるものとして、学生たちは大切に扱っていた」「ポートフォリオに基づいて実習を振り返った。あの時こうだったね、という話ができる。具体的場面や体験に戻れるので、お互いの感じ方の違いや共通点に気づくことができる」「学生の成長の過程がよくわかる。それを自分で感じ取ってくれている」

以上のことからラベルワークを用いるということは幾つかの利点があったと考えられる。

ラベルはその時・その場面の新鮮な思いが言葉で残されているため、ラベルを見れば、体験がありありと思い起こされる。また、学生の実習の学びのプロセスが一目瞭然であり、成長の転機やその時の学生の状況、周囲の状況がわかりやすく、学生にとって学びが深まる要因がわかりやすい。

ポートフォリオを用いながら面接を行い、一緒に評価しあったことは、学生にとっては驚きの体験であったようだ。

村川（2001）は「ポートフォリオを介して子どもと教師が語り合う「対話」によって、子どもと教師の双方が、この交流こそが本来的に教育的な評価活動であるということを再発見するとともに、子どもの教師に対する信頼が生まれ、評価も透明性の高いものになるのである。」[10]と述べており、評価を学生と教師の共同作業として捉え直すことが重要であるとしている。

学生と教員だけでなく、グループメンバーや看護師など、実習において学生が会話をする場面は多い。ラベルワークはそれらの会話を「対話」にする、「聴く、語る」という行為をスムーズにさせるという機能があるので、様々な実習の場面での「対話」を促進しているといえる。

ラベルワークは学生参画授業論から生まれた方法である。現在は【基準準拠型ポートフォリオ】であり、まだまだ学生主体の学生参画実習とはいい難い。とはいうものの、なるべく自分たちが作成したポートフォリオを活用するようにしたい。例えば後輩学生に実習前にオリエンテーションしてもらうのにポートフォリオを用いたりして、学びを伝承する機会をつくること

は可能であろう。

実際に学生が作成したポートフォリオを研究仲間や後輩学生に紹介したいから貸してほしい、と学生に頼むと、快く承諾してくれる。他者の目にさらされても大丈夫という自信が生まれるのだと考える。

また、これからの4年間の学びもポートフォリオを創ってみるといいね、と話すと、学生たちは将来の自分の成長を予感できるのか、是非やってみたいです、と明るく答えてくれる。

短い実習だが、こんなに自分はたくさんのことを学んだ、これからの4年間はもっと多くの学びがあるに違いないとその自分の成長に期待を膨らませているかのようである。

Ⅶ. 今後の課題

学習者参画型の実習の実現には、学生自身が自分なりの評価基準を設定し、学生が自分なりの基準で作品を選んでポートフォリオを作成する【最良作品集ポートフォリオ】が望ましいと考える。看護実習という複雑で多様な学習の場を考えると、全てが学生主体でよい、とは言い切れない部分もあり、昨今の倫理的な問題も考えると、学習段階の初期である基礎実習においては、教師主導にならざるを得ないところもある。

しかし、この方法を経験して思うのは、教師自身の【評価観】が問われるということである。学生のポートフォリオを前にして学生の姿を思い浮かべる時、自分自身が評価されているような錯覚にさえ陥る。教師自身が自分自身をリフレクションするという体験を伴う。

日本の看護教育におけるポートフォリオの導入について、ここ数年、雑誌や看護の学会で目にすることが多くなってきた。

大関（2000）は「日本の看護大学での学生評価も、従来の集団の中でどのくらいの位置にいるかを測る相対的評価や合格ラインに達したかどうかを測る評価法から、個人がどの程度学習効果を上げたか、個人の目標達成までどのくらいの位置にいるのかを測るポートフォリオの導入が有効である。」[11] とし、英国の卒後教育を紹介している。近い将来、日本も英国のように看護師の免許更新制度や卒後専門教育プログラムが必須となった場合、ポートフォリオの導入は避けられないかもしれない。

ポートフォリオ評価法については、その歴史的背景と理論背景を今後も学びつつ、実践を重ねていきたいと考えている。

尚、本文中の図（ラベルワークの作品）は学生の許可を得て掲載した。

引用・参考文献

1）杉森みどり（1999）：看護教育学　第3版、pp254-257、医学書院、東京.

2）林義樹（1994）：学生参画授業論、学文社、東京.

3）石塚淳子、佐藤道子、夏目みつ子（2001）：「臨床の知」を育てる臨床指導 ― ラベルワークを用いた基礎看護学実習の展開 ― 看護教育、42（2）、104-109.

4）林義樹（2004）：看護の知を紡ぐラベルワーク技法、参画型看護教育の理論と実践、精神看護出版.

5）林義樹（2003）：社会的創造活動理論としての『参画理論』、日本創造学会論文誌、Vol. 7, pp13-34.

6）西岡加名恵（2003）：ポートフォリオ評価法 ― 新たな評価基準の創出に向けて ―、

pp52、図書文化、東京.
7）エスメ・グロワート著、鈴木秀幸訳（1999）：教師と子どものポートフォリオ評価、pp11-16、論創社、東京.
8）http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/12/12/001210.htm
9）6）と同じ　pp67.
10）村川雅弘（2001）：「生きる力」を育むポートフォリオ評価、pp62、ぎょうせい、東京.
11）大関信子（2000）：英国の卒後教育での実際、Quality Nursing、6（3）、60-68.
12）大関信子（2000）：看護教育にポートフォリオの導入を、Quality Nursing、6（3）、52-53.
13）安藤輝次（2002）：評価規準と評価規準表を使った授業実践の方法、黎明書房、名古屋.
14）鈴木敏恵（2005）：パーソナルポートフォリオをどう「評価」するか、看護展望、30（5）、8-10.
15）鈴木敏恵（2000）：ポートフォリオで評価革命！、学事出版、東京.